
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 158

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3141. ハーバード大学教育大学院でのクラスに向けて
- 3142. 五年振りのハーバード大学教育大学院訪問に向けて
- 3143. 文献との向き合い方の再考
- 3144. 「知ること・理解すること」とは？
- 3145. ザカリー・スタインの論文より
- 3146. 博士論文のアイデアに関する備忘録
- 3147. ボストン訪問に向けて: 新たな道へ
- 3148. ザカリー・スタイン博士とハウマン・ハロウニ博士の仕事から
- 3149. ザカリー・スタインの最新論文を読んで
- 3150. 三つ目の修士号を取得して思うこと
- 3151. 「良い教育」とは何なのだろうか？
- 3152. 雪崩のような気温を持つ不思議な一日
- 3153. 緩やかに進むライフワーク
- 3154. 一音成仏: 芸術教育の歴史的変遷
- 3155. 博士論文執筆への意欲
- 3156. 多様性・固有性: 他者の幸福と自己の幸福
- 3157. 実践的な哲学
- 3158. 光で満たされた海: 覚めぬ夢
- 3159. 暫定的な絶対的真実及び異様な熱気を持つ書物
- 3160. ブラヴァツキーとフーコーの書籍より

今朝は六時過ぎに起床し、六時半頃から一日の活動を開始した。もうこの時期になると、起床時はまだ闇に包まれたままである。七時を過ぎてからようやく朝日が昇り始めるようになった。季節の進行を確かに感じる。秋が徐々に深まり始めているが、昨日と同様に、今日も比較的暖かい気温となる。その証拠に、今日の最高気温は24度まで上がるそうだ。

昨日は、久しぶりにフローニンゲン大学のキャンパスに立ち寄り、読みたい論文を印刷した。今月末から来月の初旬にかけて、ハーバード大学教育大学院(HGSE)に訪れ、二つのクラスを聴講できることになった。二つのクラスを受け持つ教授にお願いをして、事前にシラバスを送ってもらい、当日のクラスの課題論文を昨日印刷した。今日からそれらの論文に一度目を通し、クラスのある前日にまた読み返すことをしたいと思う。

ボストンに到着した次の日に参加するクラスは、スティーブ・サイデル教授の「芸術教育:哲学的領域と内省的実践」というコースのクラスだ。サイデル教授は、HGSEの中でも私が最も関心を寄せている芸術教育に関するプログラムのディレクターを務めており、今回彼のクラスに参加することができて嬉しく思う。

シラバスを確認すると、当日のクラスの大きなトピックは、普遍的な権利から芸術教育を考察していくことにあるらしい。必読文献の中には、ユニセフが発行している人権に関する資料などもあり、人間の権利の観点から芸術教育を考えていくというのは面白いトピックだと思った。

当日のクラスで課題となっている論文は“Arts in Education and Society Today: An Overview (2011)”というものであり、この論文はアジアの芸術教育について論じている。本格的にこの論文を読み始めるのは今日からだが、昨日は印刷ついでに中身をパラパラと確認していたところ、アジア人である自分にとって非常に興味深い内容であり、当日のクラスの中でいろいろと発言する役割を担うことができるように思った。論文を読みながら、自分の考えを余白に書き込んでいくことを行い、当日のクラスに向けた準備をしていきたい。

芸術教育に関するプログラムを提供している大学院はいくつもあるが、その中でもHGSEに注目しているのは、教育哲学者のキャサリン・エルギン教授がそこにいることにあると言っても過言ではな

い。エルギン教授は、私が最も敬意を払っている同年代の哲学者ザカリー・スタインの博士論文アドバイザーを務めていた方であり、専門は認識論と教育哲学である。

エルギン教授は秋学期に、「教育哲学」と「芸術と認識」という二つのコースを提供しており、今回は有り難いことに後者のクラスに参加することになった。どちらのコースも少人数のゼミナール形式で行なわれているらしく、少人数での授業を好む私にとっては非常に嬉しく思う。

当日のクラスに向けて、エルギン教授の協働者でもあった哲学者ネルソン・グッドマンの“The End of the Museum (1985)”が課題論文に挙がっている。エルギン教授からの影響もあり、最近グッドマンの仕事に注目をしていたところだったので、この論文を読むことは非常に楽しみだ。また、「美術館の終焉」というタイトルが示すように、欧州で様々な美術館を巡る中で醸成された自分の問題意識と相通じるような内容がこの論文の中に書かれているような気がするため、今日はまずこの論文を優先的に読み進めていこうと思う。

気づけば、ボストンに訪れる日がどんどんと近づいてきた。五年振りのボストン訪問が非常に楽しみだ。フローニンゲン:2018/9/19(水)07:11

No.1317: In the End of A Certain Saturday

When I realized it, today was approaching the end. Having hope toward tomorrow, I'll go to bed later. Groningen, 20:32, Saturday, 10/13/2018

3142. 五年振りのハーバード大学教育大学院訪問に向けて

時刻は午前七時を回り、しばらく経った。ようやく辺りが明るくなってきた。

確かに今日は暖かい日になるという予報が出ているが、早朝のこの時間帯は肌寒い。薄青い空がとても静かに見える。

今日は、今月末に訪問するハーバード大学教育大学院(HGSE)での授業に向けて、いくつかの論文を読み進めていくことと、引き続きハワード・ガードナー教授の書籍やシュタイナー教育に関する書籍を読み進めていく。また、こうした読書に並行して、作曲実践を積極的に行っていく。仮に来年

大学院に戻って探究生活をするようになったとしても、今のような形で作曲実践を進めていきたいと思う。来年までには、自由自在に作曲できる境地に一步でも近づきたいと思う。

今回HGSEに訪問するのは五年振りであり、その時はカート・フィッシャー教授との面会が目的であった。厳密には、日本のある大学の研究者の方が私に連絡を取ってくれ、通訳としてフィッシャー教授と面会する機会を得た。面会の前日に、フィッシャー教授の研究室の場所を確認しにHGSEの研究棟の中にいたところ、別の教授から声を掛けられた。フィッシャー教授の研究室を探している旨を伝えると、親切に場所を教えてくれ、せっかくだから今から行う自分のクラスを見学していかないか、とおっしゃった。

その教授の名前は忘れてしまったのだが、統計学を専門としている教授であったことを覚えている。その教授のクラスを聴講したのが今から五年前であり、今回は二つのクラスを聴講する幸運に恵まれた。しかもこのたびは、自分が最も関心を寄せているテーマに関するクラスであるため、今からその日が待ち遠しく思う。アムステルダム空港を出発するのは9/27の午前11時であり、ボストンには当日の午後1時に到着する。

その翌日に、HGSEの芸術教育プログラムのディレクターを務めているスティーブ・サイデル教授のクラスに参加する。午前8時半から正午までの3時間半のクラスであり、比較的時間が長いように思えるが、途中の休憩時間があることや、クラスの前に軽い食べ物や飲み物が提供されるらしく、和やかな雰囲気かつゆっくりとしたペースでクラスが行われるのだろうと予想する。

サイデル教授からは、クラスの前の朝食を共にしながら、そこで自己紹介を簡単にするように依頼された。サイデル教授のこのクラスは、芸術教育プログラムに所属する者にとっては必修のクラスであるため、どのような人たちがこのプログラムにいるのかも肌感覚を通じて理解したいと思う。特に、このプログラムに在籍する留学生を見つけ、その人にこのプログラムやHGSEでの生活について詳しく尋ねてみようと思う。

北欧旅行から戻ってきてまだそれほど時間が経っていないが、今回のボストン訪問への期待が高まっていく。自分の中でまた何かが動き出しているのを実感しており、こうした時期においては活動

的になるのもうなづける。自分に与えられた役割を全うするために、ボストンへ訪問し、これからの日々につなげていきたいと思う。フローニンゲン:2018/9/19(水)07:41

3143. 文献との向き合い方の再考

もうしばらくすると昼食の時間となる。午前中は、大変心地良い風がフローニンゲンの町を流れていた。確かにそこには肌寒さがあるのだが、生命を躍動させるような力も同時に感じる。今もそうした風が優しく吹いている。

今日の空は快晴であり、愛らしい美しさを持つ草花が生い茂っているかのような空が広がっている。一つの花を摘ませてもらい、それを携えて今日一日を充実したものにしていきたいという思いを早朝に持った。

探究活動や創造活動に従事している合間や、その一区切りとしてふと窓の外を眺めると、素晴らしい風景が広がっていることを改めて有り難く思う。空を見ていて飽きることはないし、風に揺られる街路樹を見ていても飽きることはない。そこに小鳥などの小動物がやってくれば、なおさら見飽きることはない。

そのようなことを考えていると、昨日の夕日がとても美しかったことを改めて思い出した。それは讃歌を歌っているかのような夕日であった。もしかしたら今日もまた昨日のような夕日を拝むことができるかもしれない。フローニンゲンの夕暮れ時の楽しみは、その美しい夕日を見ることにある。

今朝はハイドンに範を求めて一曲ほど曲を作った。昼食後に仮眠を取った後には、テレマンに範を求めようと思う。テレマンの曲のメロディーに面白さと共感の念を絶えず持っており、テレマンの曲を参考にするのは毎回喜びをもたらす。明日は久しぶりにサティに範を求めてみようと思う。

午前中には、“The End of the Museum (1985)”と“Arts in Education and Society Today: An Overview (2011)”の二つの論文を読み終えた。本来であれば、論文の一つ読むたびごとに自分の考えを書き留めておくのが良いかもしれないと改めて思う。私は、一つの論文を読み終えると、そのままの勢いで次の論文へと次々移っていく傾向があるが、これは下手をすると、論文の単なる消費になりかねないため注意が必要である。せっかく一つの論文を読むのであるから、できる限りの学

びをそこから得て、自らの血肉にしていきたいと思う。そのためには、消費型の読書をするのではなく、論文を読むたびごとに立ち止まり、自分の考えを文章で書き留めておくことが有益だろう。論文にせよ、書籍にせよ、それを読んでいる最中はマインドフルネスの状態となり、読了後もマインドフルネスの状態のまま文章を書くことが大切だ。

書籍においては、印象に残っている事柄を一章ごとに書き留めておくとも良いかもしれない。論文や書籍との向き合い方についてはここ数年何度も考えさせられることがあったが、ここでまた改めてそれについて考えることは意味があるだろう。

文献から得られた知見をいかに自分の思想の形成に役立てていくか。それを実現させていくためには、やはり読むたびごとに何かしらの文章を書き留めておくことがカギになるだろう。文章を書くことによって知識を定着させ、また文章を書くことによって新たな課題を見つけていく。自分に問いかけながら文章を書き、その問いが開く新たな問いに向かっていくこと。そうしたことを心がけながらこれからの読書を行いたい。フローニンゲン:2018/9/19(水) 11:53

3144.「知る事・理解すること」とは？

今日の午前中に読んでいた、ネルソン・グッドマンが執筆した“The End of the Museum (1985)”という論文を読みながら考えていたことを備忘録がてら書き留めておきたいと思う。グッドマンは、ハーワード・ガードナー教授やキャサリン・エルギン教授といった現在私に関心を寄せている教授の師であり、協働者であった人物である。

ガードナー教授やエルギン教授の仕事を参照すればするほどに、彼らの師であったグッドマンの仕事に関心をもち始めている自分がある。今からおよそ10年前に、『世界制作の方法 (ちくま学芸文庫)』を購入しており、グッドマンの仕事についてこれまで一切触れてこなかったわけではない。だが、その翻訳書を読んでいた当時の私は、グッドマンの仕事を真に理解することはできていなかったように思う。そうした状態から、今は時間をかけてでも、グッドマンの仕事を辿ってみようという気持ちがある。午前中に上記の論文を読んだのは、きっと何かの始まりのサインだろう。

この論文の中でグッドマンが、図書館と美術館の違いについて触れており、それが目に止まった。一つ目の違いは、図書館では書物の貸し出しが可能であるのに対して、美術館では作品の貸し出

しが基本的に不可能であるという点。そして二つ目の違いは、図書館に通うほとんどの人は本の読み方を知っているが、美術館に通うほとんどの人は作品の見方を知らないという点だ。それぞれの相違に対して、グッドマンはさらに細かな説明を行っている。二つの違いの中でも、私は特に二つ目の相違に着目をしてしばらく考え事をしていた。

厳密に言えば、本の読み方も非常に奥深いものであるため、図書館に通う人のほとんどが書物の読み方を知っているとは思えない点もあるが、それを脇に置いて、美術館に通う人のほとんどが作品の見方を知らないというのはその通りかもしれないと思った。だが、ここで疑問に思ったのは、そもそも「芸術作品を知る」というのはどういうことかという点だ。この点を避けては芸術教育の意義を語るなどできないように思えてくる。そして、まさにこの点はグッドマンやエルギン教授が専門とする認識論の主たるトピックであることに気づく。

「芸術作品を知る」というトピックは、音楽鑑賞でもスポーツ観戦でも通用する話だと思う。認識論の観点から、「そもそも知るとはどういうことなのか?」「理解するとはどういうことなのか?」というテーマをとことん掘り下げて考えてみたい。

そうしたことを考えながら、芸術作品を知るための教育というものが大切になることを改めて思う。書物の読み方に関しては、それなりの教育が学校においてなされているが、芸術においてはその質は満足のいくものではないと思う。

芸術作品を知ることが、作品を知ることを超えて、作品を鑑賞している自己をさらに深く知り、そこから世界と自己とのつながりを知ることにより拡張されていけば、芸術鑑賞は人生を深め、深められた自己を通じたこの社会への関与までも深めてくれるのではないかという期待がある。現時点においてそれは完全に期待であるが、こうした希望的展望を持ちながらでなければ、芸術教育の意義や価値をとことんまで探究することはできないように思われる。芸術にせよ、自己にせよ、世界にせよ、今の自分の抽象的なテーマは「知ること」「理解すること」にあるようだ。フローニンゲン:2018/9/19(水)12:12

No.1318: Transition of Sunrise Colors

A peaceful Sunday has come. I've watched a transition of sunrise colors since the early morning.

It's already bright now, but it would show me various expressive colors toward the end of the day. Groningen, 08:47, Sunday, 10/14/2018

3145. ザカリー・スタインの論文より

時刻は午後五時を迎えつつある。今は少しばかり曇りがちの空だが、西日が書斎の窓から室内に差し込んでいる。

ぼんやりと外を眺めていると、「何かの足音」が聞こえて来る季節に入っているのだと知る。それは静かに進行している内側の変容の足音である。

夕方より、ザカリー・スタインの“Love in a Time Between Worlds: On the Metamodern “Return” to a Metaphysics of Eros (2018)”を読み始めた。スタインの仕事を参考にし始めてから、かれこれ八年ほどの時間が経つが、これほど長く一人の学者の仕事を継続的に追いかけていることはないように思える。ケン・ウィルバー、ロバート・キーガン、オットー・ラスキー、カート・フィッシャーなど、私に多大な影響を与えてくれた学者は数限りないが、その中でもスタインは私にとって特別な存在のように思える。

ジョン・エフ・ケネディ時代に初めてスタインの論文を読み始めてから数年後には、スタインはレクティカの共同設立者であったから、私がレクティカに在籍している時にはメンター役として様々な論文を送ってもらったこともある。お互いの生活地が離れているために一度も直接会ったことはなく、五年前にボストンを訪れた際にはお互いのスケジュールが合わず、結局今もまだ直接会って話したことはない。だが、スタインは私にとって非常に大切な存在であり、彼の仕事にはいつも感銘を受けている。

今日はスタインの最新の論文を読んでいた。この論文を読みながら、様々なことを考えさせられたが、とりあえずその中から一つだけ書き留めておきたいと思う。論文を読みながら考えていたのは、「現実世界の全ては幻想である」という危険な思想についてである。これは危険な発想かつ、かつ脆弱な知性から生み出されたものであることがスタインの論文を読んでいるとわかってくる。

この発想の危険性については言うまでもなく、それが極度なニヒリズムを生み出したり、幻想という名の下にいかなる利己的・暴力的な行動を助長しかねない危険性を秘めていることにある。一方で、私が着目していたのは、こうした発想を生み出す知性の質についてである。スタインの言葉を用いれば、これはモダニストの発想(ウィルバーの段階モデルで言えば「合理的段階」)ではなく、ポストモダニストの発想(「相対主義的段階」)としてよく見受けられるものかもしれない。モダニストは一つの真実に固執する形で自らの主張を打ち出していくが、ポストモダニストは自らの主張を相対化する点に大きな違いがある。

ポストモダニストは多面的な視点を取れるという構造的な特性ゆえに、病理的側面を持つ。それはウィルバーの言葉で言えば、「多視点取得による麻痺」という現象だ。これは無数の視点を取得することができるがゆえに、またそれらの視点を相対化してしまうがゆえに、結局拠り所にするべき真実が何なのかが極めて曖昧になってしまう現象を指す。「全ては幻想である」という主張は、拠り所にするべき真実さえもが相対化されてしまい、それがポストモダニストの病理的側面であるニヒリズム的な態度につながっているように思えてくる。

「全ては幻想である」という主張には、スタインが述べるように、絶えず質的に差異を内包するリアリティ構造を平準化してしまうという罫から生まれているように思えてくる。スタインが提唱する「メタモダニスト」というのは、ポストモダニストの後に発露する発達段階であり、この段階特性に関する説明は、これまでの発達論者の説明よりも随分と説得力のあるものに思える。

現実世界に地に足の着いた哲学者が高度な段階特性について非常に明瞭に説明を加えてくれているという点において、この論文は非常に価値の高い論文のように思う。前半後半そして結論部を合わせると、三部構成になっており、私はまだ前半しか読むことができていないが、明日には全てを読み終え、また何かを書き留めておきたいと思う。フローニンゲン:2018/9/19(水) 17:18

No.1319: A Walk of A Little Bird

Watching a walk of a little bird, I can notice that it has various stories. So do humans. Groningen, 15:39, Sunday, 10/14/2018

時刻は午後八時に近づきつつある。遠くの空を眺めてみると、昨日よりも幾分日が沈むのが早くなっている気がする。あと三十分もすれば完全に日が沈んでしまいそうである。

今日もとても充実した形で一日が過ぎていった。旺盛な探究活動と創造活動に従事することができ、明日も今日と同じような日になればと思う。

ちょうど明日は、フローニンゲン大学で取得した二つ目の修士号の卒業証書を受け取りにキャンパスに行く。私が在籍していた頃と少しばかり大学の様子が変わり、学生課が社会科学キャンパスの中に移転となったようだ。

明日は昼食を食べたから、散歩がてら大学キャンパスに歩いていきたいと思う。この二年間通い続けてきた通学路を通ることはもうこれからあまり無いであろうことを思うと、どこか感慨深い気持ちになる。

この二年間は本当にフローニンゲン大学にお世話になった。この大学で学びを得なければ、今の自分はなかったであろう。本当に貴重な学びの場を与えてもらったことに改めて大きな感謝の念を持つ。

昨日か一昨日に、博士論文のアイデアについて書き留めておいたように思う。今はまだ博士課程に進むかさえ分かっていないのだが、論文のアイデアは膨らむ一方だ。

今日も少しばかり考えたことがあったので、追加で書き留めておきたい。先日言及したように、仮に博士論文を執筆するのであれば、芸術教育の意義をまずは歴史的な展望をもとに探究していこうと思う。その際には、私がこの八年間にわたって注目し続けている教育哲学者のザカリー・スタインの博士論文の書き方を参考にし、芸術教育のカリキュラムとその背後にある教育思想を歴史的に振り返りながら、それらを発達理論の観点から説明を加えていく。

最近のスタインの論文にあるように、プレモダン、モダン、ポストモダン、メタモダンの分類を参考しながら芸術教育の変遷を分析していく。そうした分析に合わせて、それらの各段階に根ざされたカ

リキュラムが芸術性や霊性の発達に及ぼしうる影響について考察をしていく。とりわけ霊性に関する言及をしていく際には、シュタイナーの教育思想に強く立脚することになるかもしれない。これからは、博士論文のテーマを支える重要な教育哲学者を選別していき、彼らの思想を深く学び、それをうまく持論の展開と深化につなげていくように活用していく。

芸術教育の意義について考察する際には、上述のように芸術教育を取り巻く大きな思想について言及していくことになるため、社会哲学的な観点から批判理論 (critical theory) を用いることも一考に価する。そして、そもそも芸術教育の意義に関する論を進めていく前に、そもそも芸術教育の価値をいかに認識するのか、その認識の度合いをいかに担保するかに関して、認識論の観点を採用するのも面白いかもしれない。その際には、キャサリン・エルギン教授やネルソン・グッドマンの思想が非常に参考になるだろう。徐々にではあるが、芸術教育と霊性教育について備忘録を書き進めていくごとに、自分のテーマの輪郭が見え始め、そのテーマに対するアプローチも見えてきている。

少なくとも今年と来年にかけては、博士論文のテーマを練る期間としたい。博士課程への進学を焦る必要は全くなく、自分を捉えて離さないテーマが四、五年にわたる探究に資するものなのかどうか、そして博士論文としてまとめ上げるに資するものだと分かってから、納得した形で博士課程に進もうと思う。フローニンゲン:2018/9/19(水) 20:07

3147. ボストン訪問に向けて:新たな道へ

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える頃に一日の活動を始めた。時刻は七時に向かいつつあるが、まだ外は暗い。ようやく東の空がわずかばかり明るくなってきた段階であり、完全に日が昇るのは後一時間ぐらいはかかるだろう。早いもので、来週の今日はボストンに向けて出発する日である。

アムステルダム空港からボストンに向かうフライトは11時台のため、それほど早くないのだが、フローニンゲンの自宅からアムステルダム空港までは二時間半以上の時間がかかるため、当日は今日よりも早く起床する必要があるだろう。六時ぐらいに自宅を出発することができればと思う。

五年振りのボストン訪問への期待感が募る一方である。おそらくボストンの町に大きな変化はないだろうが、それでもこの五年の間に何かしらの変化を遂げているだろう。何よりも、ボストンを訪れる

私自身がこの五年間において変化したのであるから、ボストンの町から受け取る印象は過去のものとはきっと異なるに違いない。五年前にボストンを訪れた時には、地下鉄とバスのリチャージ可能なカードを購入していた。最後にボストンを訪問して以降は、そのカードを本のしおり代わりに使っており、どの本に挟んでいるかを忘れてしまった。今回は合計で七日ほどの滞在であるため、一週間の間に地下鉄やバスに乗り放題なカードを購入するのが良いかもしれない。

それほど距離でない場合は歩きで移動することが多いだろうが、滞在の半ばに訪れるエマーソン博物館やソローの旧邸に訪れるためには、バスや地下鉄を何回か乗り降りする必要がある。そうしたことを踏まえると、ボストンの空港に到着したら七日間有効なカードを購入しようと思う。

少しずつ夜が明け始めている。早朝の空の様子を確認すると、今日はどうやら雲があるようだ。ただし天気予報を確認すると、今日は一日を通して晴れのようなのであるから、午後から大学キャンパスを訪れる際には快適な散歩となるだろう。

本日、正式に三つ目の修士号の証書を受領する。昼食を摂り終え、少し休憩したら大学キャンパスに向かいたいと思う。今から二年前のこの日も、きっと大学キャンパスに通っていたに違いない。あれから流れたこの二年の月日に対して少しばかり思いを巡らさずにはいられない。

これまで通っていた道を歩くことはこれからめっきり少なくなるだろう。今日はそれを理解した上で、これまで歩いてきた道の上をゆっくりと歩きたいと思う。

歩いてきた道は常にそこにあり、そしてそれは自分の内側で新たな道へとつながる道になっていく。今日もまた、自分の内側で新たな道を歩き続けていきたいと思う。フローニンゲン:2018/9/20(木)
07:01

3148. ザカリー・スタイン博士とハウマン・ハロウニ博士の仕事から

今日も昨日と同様に、探究活動と創造活動に明け暮れる一日としたい。早朝に、モーツァルトに範を求めて一曲作り、そこからは読書を行う。昨日に引き続き、ザカリー・スタイン博士の“Love in a Time Between Worlds: On the Metamodern “Return” to a Metaphysics of Eros (2018)”を読み進めていく。スタイン博士のこの論文は近々出版される書籍の一部になると思われるが、書籍が出版

され次第、それを購入したいと思う。この八年間と同様に、スタイン博士の仕事から得ることはまだまだあまりにも大きい。ヘンリー・デイヴィッド・ソローとは違う場所だが、スタイン博士もソローのように、奥さんとボストン郊外の自然の近くに住んでいる。

今回のボストン訪問において、スタイン博士に連絡を取ることはなかったが、またいつか会う機会があれば、ぜひ書籍や論文を含めて、いろいろなことを尋ねてみたいと思う。スタイン博士が過去に出版した書籍はとても社会的な意義のあるものであり、一時期は日本語に翻訳をして出版してもいいのではないかと考えていたほどだ。今もまだそうした思いは変わらずにあるが、やはり自分は翻訳者ではないため、翻訳に関しては慎重になっている。だが実際にスタイン博士に会い、改めて日本語で出版することに大きな意義を見出した場合には、自ら翻訳者としての仕事を担っていこうと思う。

正直なところ、英語空間には良書は無数に存在しているのだが、自分が翻訳しようと思うような書籍は本当に稀である。スタイン博士の書籍はそうした稀な書籍であり、自分がどれほどスタイン博士の仕事に敬意を表しているかがわかる。また、それほどまでにスタイン博士の仕事は自分の関心に合致しているとも言えるだろう。

まだ博士課程への進学は随分先のことだと思うが、博士論文で取り上げるテーマの都合上、可能であれば、スタイン博士に論文アドバイザーの一人になってもらいたいと思っている。そうしたお願いをするためにも、これから徐々に関係性を育んでいきたいと思う。

ちょうどスタイン博士と同じタイミングでハーバード大学教育大学(HGSE)の博士号を取得した、ホウマン・ハロウニ博士の仕事を先日偶然知った。来週と再来週にHGSEに訪問するにあたり、教育哲学を専門としている教授について調べていると、ハロウニ博士の存在を初めて知った。スタイン博士ほどには論文を書いていないが、過去に執筆した論文の概要を眺めてみると、私の関心とも重なる部分があった。何より、スタイン博士と同様に、教育を取り巻く問題を社会哲学的な広い観点で捉えていることも共感した点である。さらには、ハロウニ博士が提供する二つのコースは極めて興味深いものであり、今回はスケジュールの都合上、ハロウニ博士のクラスを聴講させてもらうことをお願いしなかったのだが、批判理論を活用しながら、政治が教育に及ぼす影響を考察していくことには大きな関心がある。

昨日二つほどハロウニィ博士の論文をダウンロードしたため、本日大学キャンパスに脚を運ぶ際にはそれらを印刷し、明日以降から論文を読み進めていきたい。フローニンゲン:2018/9/20(木)
07:24

3149. ザカリー・スタインの最新論文を読んで

たった今昼食を摂り終えた。午前中の振り返りをしたら、自宅を出発し、卒業証書を受け取りにキャンパスに向かおうと思う。

今日は曇ったり、晴れたりを繰り返す変動に激しい天気である。幸いにも雨は降らないようなので、安心してキャンパスまで歩いていこうと思う。街路樹の葉が随分と紅葉しており、それを眺めると、日本の風光明媚な秋の景色をふと思い出す。

午前中はモーツァルトに範を求めて一曲ほど作った。現在参考にしている変奏曲はまだまだ曲が続くため、今日はもう一度モーツァルトに範を求めたいと思う。

今のところ、特定の作曲家一人に範を求め続けることをせず、広く様々な作曲家の作品を参考にしている。これが良いことなのかどうかはわからないが、幅広く様々な作曲語法に触れることができているように思う。当然ながら、一人の作曲家を集中的に参考にすれば、その人物の作曲語法が身につくというのは確かだろう。だが私の特性から、広く様々な作曲家に範を求めながら自分の作曲語法を確立していくという方法の方が好ましいようだ。それは自分の学びのスタイルであり、同時に魂の求めだと言ってもいいかもしれない。

これから大学キャンパスに訪れ、戻ってきてから仮眠を取り、その後に午後の作曲実践を始めたい。午前中は、教育哲学者のザカリー・スタインが最近執筆した“Love in a Time Between Worlds: On the Metamodern “Return” to a Metaphysics of Eros (2018)”という論文の続きを読み、昼食前に一読目を終えた。この論文を読む前は、メタモダンという発想の枠組みがどのようなものかを学ぶことに焦点を当てていたのだが、読み進めるうちに、スタインが展開する「愛」の考え方が非常に洞察に溢れており、大変感銘を受けた。

日本の社会では、「婚活」をはじめとして、そこには旧態依然とした男女間の関係のあり方がまだ根深く、それはスタインの言葉で言えば、「ロールメイト(role mate)」を求めているに過ぎないのではないかと思う。また、「ソールメイト(soul mate)」という発想は、確かにロールメイトという考え方を超えたものであるが、得てしてそこでの愛はパートナーとの間の限定的なものに留まる。詳しい説明はスタインの論文を読んでもらいたいが、ソールメイトを超えて「ホールメイト(whole mate)」という考え方には共感できるものがあった。

これは自己愛やパートナーとの愛を超えて、より広く浸透していく愛のあり方を指している。スタインのいずれの論文においても、こうした概念を扱う際に、ニューエイジ的な論説に陥らない点が優れていると思う。今回の論文で言えば、ロールメイトやソールメイトという概念を蔓延させている社会的な要因の考察があり、ホールメイトの愛を実現させていくための第一歩についても論述している。確かにタイトルは「愛」という言葉が含まれているのだが、これまでのスタインの論文ではそうした概念は扱われておらず、今回それを直接的に取り上げて言及しているのは新鮮な驚きがあった。

スタインのどの論文でもそうだが、現代社会に蔓延する愛のあり方について言及せざるをえなかったスタインの強い思いをこの論文から汲み取ることができる。この論文をきっかけにして、過去のスタインの論文をまた読み返してみようと思う。フローニンゲン:2018/9/20(木)13:14

3150. 三つ目の修士号を取得して思うこと

時刻は午後五時を迎えた。これから夕食までの時間を、協働プロジェクトに関する明日のミーティングの準備に充てたい。

昨夜は、自分の作った曲を聴きながら闇夜を眺めていた。今日も一日が終わりに近づいているのだという強い実感が湧き上がり、自分は毎日死に、毎日生き返る日々を過ごしているのだと再認識した。

日々が生と死の繰り返しであり、新たな誕生を迎えることに驚きを隠せない。今朝も目覚めたら自己だと認識する自分がいた。そしてそれは昨日からの同一性を保ちながらも、新たな自己であることを忘れないようにすることを早朝に誓った。

今日は晴れたり曇ったりを繰り返す天気が続いている。昼食後に大学キャンパスに行き、今年一年間在籍していたプログラムの修了証書を受領した。

去年は厳かな場所で開催される卒業式にて、修了証書を受け取った。今年はスケジュールの都合上、学生課で修了証書を受け取ることになったのだが、それを手渡された時には小さな喜びと共にどこか身が引き締まる思いがした。

気がつけば、欧米の大学院で修士号を三つ取得することになったが、学位が増えるたびに自分の無知さを実感する。修了証書を受領した時に背筋を正されるような思いになったのは、自分の無知さを再認識したことと関係しているだろう。

この社会に深く関与し続けていくためには、私は学び続けていく必要がある。当然それは必ずしも学位を取得するような学びである必要はないのだが、必要であれば学術機関に何度でも戻り、そこで本格的な探究を行っていく。

ちょうど今年一年間は学術機関から離れる期間であるが、来年は再び芸術教育と霊性教育を探究しに大学院に戻る予定だ。そこではおそらく最後になるであろう四つ目の修士課程に在籍することになる。四つ目の修士号を取得して初めて、自分は博士課程への進学準備が整ったと思えるようになるだろう。そのような予感がしている。

今年二年間は、科学的な観点から人間発達と教育について探究してきたが、今の私の関心はそれらを哲学的に探究することである。この思いは日増しに強くなる。

興味深いことに、学術の世界における最高学位である博士号は、一般的にDoctor of Philosophy (PhD)と呼ばれており、学位の内容が哲学ではなくても“Philosophy”という単語が含まれる。欧州に来てから強く実感するのは、ある領域の探究を進めれば進めるだけ、どうしても哲学的な領域に踏み込んでいかざるをえないということだ。人間発達と教育に関する探究において、私が科学的な観点を大切にしながらも、探究の軸を科学から哲学に移したのは納得がいく。

ふと、今から一年半前にザルツブルグで開催された非線形ダイナミクスの国際学会において、シナジェティクスの創始者であるハーマン・ハーケン教授が「この歳になると関心がますます思想的なも

のになる」と笑いながら述べていたことを思い出す。90歳を迎えた碩学の言葉が今でも記憶に残っている。欧米の大学院を転々とし、世界の様々な学者と交流し、彼らの仕事に触れることによって、自分の身の丈がわかってきている。

私は焦ることなく自分の探究を自分のペースで進めていきたいと思う。その探究の過程で、常に何かしらの形でこの世界に関与していくこと。それを行うのが自分に託された役割である。フローニンゲン:2018/9/20(木)17:18

3151.「良い教育」とは何なのだろうか？

時刻は午後の九時を迎えつつある。つい先ほど、協働プロジェクトに関する明日のミーティングに向けた準備を終えた。

今日は夕方に、ハワード・ガードナー教授の“The Unschooled Mind (1995)”の初読を終えた。ガードナー教授の書籍を読んでいていつも思うのは、ほとんどの書籍が一般向けに分かりやすく書かれているということであり、その点にいつも感銘を受ける。

今回の書籍は、確かに記述量としては非常に多いのだが、文章が平易であるため、多くの読者にとってとても読みやすいのではないかと思う。本書を読みながら、改めて発達心理学者のローレンス・コールバーグが述べていた教育の目的について考えを巡らせていた。端的には、コールバーグは、教育の最大の目的を発達に置いていた。ここで述べている発達というのは、心身両側面での発達であり、それは道徳的・倫理的な知性の発達を当然含んでいる。この点に関しては、ガードナー教授も同意しているようで、私も教育の目的の一つには発達を挙げることができると思う。

教育は個人の健全な発達を促し、社会の健全な発達を促すことに資する必要があると思う。おそらくそれは教育の本質的な目的でありながらも、同時にそれは必ず満たさなければならない最低限の目的であるとも言える。だが、現代の教育では、果たしてそうした最低限の目的が満たされているだろうか。個人が継続的な発達を一生涯にわたって実現させていき、発達に応じてこの世界への関与が深まり、社会の健全な発達が実現されていると言えるだろうか。私にはそれが実現されているようには見えない。現代の教育は、コールバーグが述べる教育の目的の本質を見誤ってしまっているのではないだろうか。

そこからとりとめもなく、教育についてあれこれと考えていた。湧き上がる問いはどれも古典的なものでありながらも、教育哲学と密接に関わる本質的なものばかりであった。

結局のところ、「良い教育」とはなんなのだろうか？どのような教育が良い教育と言えるのだろうか。この問いに対して、より幅広く、より深く考えていきたいという思いが湧き上がってくる。

上記のコールバーグの観点は、良い教育を考える上で極めて重要な役割を果たすだろう。良い教育の条件の一つとして、個人と社会の発達を育むものであることを挙げることができるだろうが、当然ながら、これだけでは全く不十分だ。もう少し具体的に考えようしてみると、「学力が向上したのはいいものの、それによって子供たちの幸福度が下がっている場合に、それは良い教育と言えるのか？」という問いが湧いてきた。この問いは日本の教育の現状を指しているかのようだ。

より厳密には、本来極めて限定的な形で設定された「学力」なるものが、ある特定のテストによって低下傾向を示そうものなら、本来限定的に設定されたはずの学力なる虚構の産物を無理に引き上げようするような状況だと言えるかもしれない。これは本当に荒唐無稽な状況だと言えるだろう。

本来より慎重に定義づけられるべき「学力」が、非常に限定的なテストの点数などによって評価される類の狭いものとして捉えられ、しかもそれを向上させることに躍起になった結果、仮に子供たちの幸福度が下がっているような状況を生み出しているのであれば、そんなものは教育でもなんでもないだろう。

「良い教育とは何か？」という問いへの回答は終わりが無いほどに多面的かつ深いものを考えることができるだろう。だが少なくとも、人間の発達と社会の発達を根幹に据えるということは極めて重要であると思うし、教育というものを一面的に捉えすぎる現代の教育思想は改善されていく必要があると強く思う。

「教育とは何か？」「良い教育とは何か？」という終わりのない問いと向き合い続けていくことは、自分に課せられた一つの大切な役割だと認識している。明日からもそれらの問いと向き合いながら、一つ一つ自分の考えを深めていき、それを教育の世界に還元していく試みに従事していく。フローニンゲン:2018/9/20(木)21:17

今朝は六時過ぎに起床した。一日の活動の開始と共にその日の天気予報を確認することは日課の一つであるが、今日はどうも変な天気だ。目覚めた早朝の今が気温が最も高く、午前中から夜にかけて気温がどんどん下がっていく。普通は早朝の気温が低く、午後一度気温が上がり、あたかも山を描くような気温の動きになるはずだが、今日は雪崩のように早朝から夜にかけてほぼ一直線に気温が下がっていく。なんと、早朝の今の気温は20度であり、これまでの日中の最高気温のような温度である。ここから時間を追うごとに、気温がどんどん下がっていくことになるそうだ。

昨日にCNNのニュースで報道されていたように、欧州を移動している暖気がこの異常な気温の動きをもたらしているのだと思う。明日からは再びこれまでどおりの山を描くような気温の動きになり、最高気温は16度、最低気温は9度とのことである。明日以降の天気を確認すると、軒並み最高気温は15度前後、最低気温は10度を下回る日が続くようだ。今日の天気は異常であり、秋の本格的な到来の前のいたずらなのかもしれない。

早朝の風は強く、街路樹を大きく揺らしている。今日も探究活動と創造活動に打ち込む一日としたい。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。ここ数日間、教育哲学者のザカリー・スタイン博士の論文を読み進めていたこともあってか、スタイン博士が夢の中に現れた。

黒板の前にスタイン博士が立っており、なにやら高校時代の学業の様子について話をし始めた。彼は教育哲学者になる前は、音楽に明け暮れ、大学を中退して西海岸でバンド活動を行っていた。そこから、東海岸でユニークな教育(入学時のSATのスコア提出義務なし、大学における成績評価なし)を提供しているハンプシャー大学に入り直し、その後ハーバード大学教育大学院の修士課程と博士課程を修了したという経歴を持つ。

夢の中でスタイン博士が話していたのは、特に音楽のクラスに力を入れており、普通の生徒が履修する単位数よりも二倍ほどの数の音楽関係のクラスを履修していたそうだ。黒板の前でスタイン博士としばらく話をしていると、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、今日これからオンラインミーティングをする予定の協働者の方たちが現れた。立派なホテルの広々とした会議室で学会があり、それに私たちは参加することになっていた。

会場は日本なのだが、国外からやってきた学者も多々参加していた。学会において、私は司会進行役を任されており、同時に一つの発表も担当していた。

私の発表の前に、学者ではなく、一人の実務家が発表を担当した。その女性はあまり英語が話せないようであり、日本語で発表を行い始めた。その発表の通訳のようなことを適宜行い、無事にその人の発表が終わると、私の番になった。欧州での学術生活を通じて、何度も学会で研究発表を行ってきたため、いつもと同じように発表を進めていくことにした。ただし今回は司会進行に関する準備もあったため、私はほぼ何も準備しないまま当時の発表をすることになった。それでも、何とか発表はうまく進んでいった。

発表が終わると、そこで一度軽食を摂る時間となり、部屋に飲み物や食べ物が運ばれてきた。参加者はゆっくりと席を立ち、飲み食いを楽しみながらお互いの親交を深めていた。

私はコーヒーを飲みながら、その様子を遠くの方から眺めていた。今朝方の夢で印象に残っているのはそれぐらいである。その他にも夢を見ていたのだが、それらについては思い出せなくなっている。ここ数日間意識に上がっていたザカリー・スタイン博士と、今日のオンラインミーティングで意見交換をする協働者の方たちが夢の中に出てきたというのは納得ができる。ただし問題は、なぜあのような夢の形を取ったのかということであり、そこに探求の余地がある。フローニンゲン:2018/9/21 (金)07:31

3153. 緩やかに進むライフワーク

午前七時半を迎える頃になると、空は随分と明るくなってきた。ただし今朝は、うっすらとした雨雲が空を覆っている。どうやら今日は一日を通して雨が何度か降るようだ。つい先ほども、数分間ほど雨が降っていた。

早朝の七時より、目の前の道路の工事が始まっていたのだが、雨が降り始めるとともに、作業員の方たちは手を休め、どこかで雨宿りをしているようだった。

今日も探究活動と創造活動の双方に力を入れていく。探究活動に関しては、シュタイナー教育に関する書籍と、昨日大学で印刷をしてきた論文をいくつか読み進めていきたい。こうした読書に並行する形で、作曲実践を積極的に進めていく。昨日は時間の都合上、二曲しか作ることができなかったが、今日からはまた三曲ほど作るリズムに戻したいと思う。

昨夜は、今日の午前中に行われるオンラインミーティングに向けての準備をしていた。こちらの協働プロジェクトも順調に進んでおり、着実に形になりつつあることを嬉しく思う。自分の個人的な創造活動のみならず、他者と協働して世の中に製品やサービスなどの形を生み出していくことも大切なことだ。午前中のミーティングを今から楽しみにしている。

作曲実践に関しては、今日はモーツァルトの変奏曲の二曲を参考にし、久しぶりにベートーヴェンに範を求めようと思う。昨日ふと、モーツァルトの曲に一日二回ほど範を求めるということを行っていた。普段は一人の作曲家の曲を参考にしたら、必ず次は別の作曲家の曲を参考にするようにしているのだが、昨日は違った。モーツァルトの曲をもう少し集中して学ぶ必要があるように思えたのである。「集中」と言っても、曲の数を二つにした程度だが、これを日々積み重ねていけば、それは大きな学習成果につながっていくだろう。

今日も読書にせよ、作曲にせよ、緩やかに一步一步を進めていく。歩みの速度は魂の発達速度と同じになるようにしていく。それができれば、エマーソンも指摘しているように、魂が持つ内在的な発達力を活かすことができるだろう。

魂には矯正力と発達力の双方があり、常に自己を正しながら成熟の方向に向かっていく。この力を活用していくことが、継続的な発達を導いていくことになるだろう。

雨が止んだことに伴い、再び工事が始まった。時刻はまだ午前八時前なのだが、作業員の方たちの一日は本当に早い。今日もまた彼らの仕事ぶりを見ながら、自分の仕事を深めていきたい。ライフワークは日々緩やかに、そして着実に進行していく。フローニンゲン:2018/9/21(金)07:47

No.1320: A Mysterious Dream World

I'm recollecting the dream that I had last night, though some hours have passed since I woke up.

I'll compare the mystery of a dream world with that of the real world. Groningen, 10:31, Monday,
10/15/2018

3154. 一音成仏：芸術教育の歴史的変遷

午前中は雨が降ったり止んだりを繰り返していた。そのような中、雨雲が静かに何かを自分に語りかけているかのような感覚があった。

降りしきる雨を眺めながら、午前中のオンラインミーティングを終えると、そこからは空に晴れ間が戻ってきた。今は午後の三時を迎え、この時間帯の空はすっかり明るくなった。この季節の雨の後の晴れ間は、夏の頃のそれとはまた違った感覚を引き起こす。

空が晴れたら、小鳥たちがスキップを始めるかもしれない。これから夕方にかけて、小鳥たちのそうした姿を眺めることができれば幸いだ。

オンラインミーティングの前に一曲ほどモーツァルトに範を求めて作曲した。これから再びモーツァルトの変奏曲に範を求めて一曲作る。今参考になっている曲は、とにかく音符の数が少なく、どこか無駄に音符が存在していない印象を与える。無駄が省かれ、一見すると簡素な音楽世界の中に、豊かな音を鳴り響かせるモーツァルトの音楽の奥深さを改めて感じる。

「一音成仏」という言葉があるように、モーツァルトの音楽にはもしかすると、選び抜かれた最小限の音の中に全てを込める力が秘められているのかもしれない。「一粒の砂の中に宇宙を見る」という言葉と同様に、「一つの音の中に宇宙を見る」という境地をモーツァルトは開拓していたのかもしれないと思わされる。

そうしたモーツァルトにこれから範を求め、もしかしたら夜にもまたモーツァルトの曲を参考にするかもしれない。今の自分の内側には、モーツァルトの曲に触れていたいという情動のようなものが湧き上がっていることに気づいており、それに忠実に従うのが賢明かもしれない。そうすると、今日の夜だけではなく、明日からしばらくはモーツァルトの曲を集中的に参考にするかもしれない。自分の内側のそうした感覚を大切にしよう。

今日はこれまでのところ、スティーブ・サイデル教授が執筆した短めの論文“Exploding Parameters and an Expanded Embrace: A Proposal for the Arts in Education in the Twenty-First Century (2013)”と、ハウマン・ハロウニ博士の“Toward a Political Economy of Mathematics Education (2015)”と“Reframing the Discussion on Word Problems: A Political Economy (2015)”という論文を読んだ。特に、ハロウニ博士の論文を読みながら、彼が数学教育に関して採用している社会学的アプローチは、私が芸術教育の意義に関して論文を執筆するときに活用できると思った。とりわけ、ハロウニ博士が、歴史的なアプローチを用いて過去の数学教育の異なる四つの種類を見出していることは大変興味深い。

この四つの分類はそれぞれ、当時の社会を取り巻く情勢によって生み出されたものであり、全く同じでなくても、芸術教育においても、時代の変遷により何かしらの分類が見出されるのではないかと考えている。今のところ、ハロウニ博士が採用したアプローチを用いて、芸術教育の歴史的変遷を辿った上で、そこから現代における芸術教育のあり方を提言していくような論文を執筆することができればと思う。フローニンゲン:2018/9/21(金)15:23

No.1321: On the Graceful Afternoon

The afternoon is graceful as usual. I spend time in devoting myself to my academic and creative work. In the midst of it, I'm wondering about the meaning of noticing myself who enjoys such a graceful time. Groningen, 15:36, Monday, 10/15/2018

3155. 博士論文執筆への意欲

時間が経つごとに今日の天気は回復の方向に向かっている。今はすっかり晴れ間が広がっている。

昨日、無事に三つ目の修士号の修了証書を受領した。その際に、フローニンゲン大学の伝統として、証書一枚目はラテン語で書かれており、ラテン語の文章を見たとき、どこか背筋を正されるような思いになったことを思い出す。文理の区分を用いることには意味はないが、仮にその区分に従えば、文系の修士号を一つ、理系の修士号を二つ取得したことになり、いつの間にか科学寄りの自

己が形成されつつあった。だが、昨年プログラムの終わりに開眼したかのように、私は哲学へ傾倒していくことになった。

ここでは、「科学か哲学か」という二分法的な区分が存在しているわけではなく、科学を尊重した上での哲学探究に乗り出していきたいという思いが強くなっていたのである。確かに今後は哲学的探究を本格的に進めていきたいと思うが、科学的な書籍や論文を読むことはこれからもあるだろうし、それは必要なことだろう。もう一つ、自分の中で生じている最近の変化は、もう二度と学術論文は書かないと思っていたのだが、今は博士論文を書こうという意欲が芽生え始めている。そしてそれは、非常に強い意欲だ。

以前の記事で書き留めたように、私の探究はもはや自分だけの探究に収まらないものになっている。探究をしているこの自己そのものが、何かしらの与えられた役割を全うするために探究を進めているということに気が始め、探究成果を広く多くの人に共有していきたいという思いがある。そうした思いは以前からもあったのだが、以前は逆にそうした思いから、学術論文という極めて少数の人にしか読んでももらえない創造物を生み出してもほとんど意味はないのではないか、という考えを持っていた。ところが今は、そうした創造物を生み出す過程の中で知見を共有していく道が少しずつ見え始め、また、執筆された学術論文の知見を広く世に共有していく方法が見え始めている。

そしてさらに私を博士論文の執筆に後押ししているのは、様々な協働者の方との日々の協働にあると言えるだろう。日々多様な関係者と協働を進めていると、いかに自分の知見が狭く浅いものかが手に取るようにわかる。この世界へより深く関与していくためには、学び続けていくことが何より大切であり、同時に博士論文を執筆するぐらいの深い知見が必要であると日々実感するようになっていく。こうした諸々の要因が重なって、今の私は博士論文の執筆に向けて意欲を燃やし始めている。

当然ながら、私たちの人生は予測不可能なものであり、なおかつ絶えず変化をしているものであるから、今後の自分の人生がどのようなになるかはわからない。もしかしたら博士課程に進学しないという選択を取ることも十分に考えられる。ただし今は、数年以内に博士課程に進学し、自分の役割を果たすための知見を獲得し、それを世に共有しながらこの世界に関与していきたいという思いで溢

れている。フローニンゲンの街に太陽の光が満ち溢れているように。フローニンゲン:2018/9/21(金)
15:37

3156. 多様性・固有性:他者の幸福と自己の幸福

時刻は午後の七時半を迎えた。夕方に雷を伴う突発的な雨が降った。今は雨は降っていないが、依然として雨雲が空を覆っている。先ほど夕食を食べながら、多様性と固有性がいかに生態系を支えているかについて考えていた。

道行く人を眺めると、一人として同じ人がいないことに驚く。街路樹に集まる生物たちを見ているとそうだ。この世界は多様性に満ち溢れている。そして、一つ一つの生命には固有性がある。

多様性と固有性の双方があつてこそ、この生態系は維持されているのだと思う。だが、現代社会はそこに亀裂を入れようとしている。表面的には多様性や固有性を尊重する素振りを見せているが、実情はその逆を行っているのではないかと思われる。それは端的には、この現代社会に蔓延する標準化・平準化の力が依然として巨大なものであることに見て取れる。

人間に焦点を当ててみると、本来こうした多様性や固有性を育んでくれるのはやはり教育の力によるのだと思う。あるいは言い方を変えれば、教育の役割は、この社会に存在する多様性と固有性の維持と発達を担うものである必要があるのではないだろうか。

社会という一つの生態系は、多様性と固有性を失った瞬間に崩壊の道を進む。教育が持つ社会的な役割は、まさにそうした事態を防ぐことであり、それは多様性と固有性の維持・発達を担うものであるはずのように思えてくる。現代社会の教育は、果たして私たちの多様性や固有性を守り、育んでくれるものと言えるだろうか。

不気味な雨雲がどんどん勢力を増している。

欧米での生活も七年目を迎えたが、街を歩いていると時々不思議な考えを持つ。だがこの不思議な考えは、私を教育の世界に向かわせた一つの重要な考えでもある。その考えとは、真に自らが幸

福な人生を生きるためには、自己を取り巻く全ての人が幸福である必要がある、というものだ。改めて文章にしてみると、もしかしたらとかく不思議な考えでもないかもしれない。

私はよく、道を歩いている時にすれ違う人が、ことごとく私の知らない人であることに驚く。これは当たり前なのかもしれないが、この世界には自分の知らない人で満ち溢れていることに改めて驚くことがよくあるのだ。例えば、今すれ違った人がとても不幸な状態にあり、どうしても金が必要であり、突然私を襲ってくる危険性も考えられなくもない。普段何気なく私たちは無数の知らない人に取り囲まれており、彼らを何気なく信頼しながら日々を生きている。だが、彼らが仮に不幸な状態であれば何をしでかすかわからない、という考えを持ちながら私は道を歩いていることがある。そんな心配事をしながら生きなければならない世の中は、やはりどこか間違っているのではないだろうか。

そこで突如として私に降ってきた考えは、一人一人が幸福であることの必要性であり、幸福に至るための教育であった。教育が本来持つ役割は、自己の囚われからの解放であり、幸福の実現、もしかしたら個人的なものに留まることをせず、社会的な幸福を実現していくことにあるように思えて仕方がない。

自己が真に幸福であるためには、他者も幸福である必要がある。他者が幸福でないのに、自己だけが幸福感を感じているというのは自己愛的な幸福に過ぎない。そんなものは幸福ではないだろう。

自己が真に幸福であるためには、自己を縛る囚われからの解放だけでは不十分であり、他者も同様に囚われから解放を遂げ、自己を取り巻く他者も幸福であることが絶対的な条件であるように思える。フローニンゲン:2018/9/21(金)19:54

3157. 実践的な哲学

再び小雨がパラパラと降り始めた。黒い雨雲が、闇夜の到来に合わせてさらに黒さを増している。

ここ最近では、自己がはち切れんばかりに哲学書を読みたいという思いに包まれている。絶望的なまでに哲学書を読みたいというのは、希望に向かう道を歩いているということだろうか。

今日は三つの論文に合わせて、テオドール・アドルノの“Against Epistemology (1956)”を読んだ。これはもう随分と前に買っていた書籍だったのだが、未だ一度も読んでいなかった。本書では、フッサールの認識論が批判の対象になっているのだが、そもそもフッサールの認識論がどのようなものかについて私はほとんど知らないため、本書は極めて難しかった。おそらく理解できたのは全体のうちの1%ぐらいではないかと思う。

自分の関心領域の哲学書を読む際には、初読時の理解が10%ぐらいであればそれは随分と読みやすい書籍だと感じられ、今回の書籍のように関心はあるのだが、いかにせん書籍の中で記述されていることの土地勘がほとんどない場合には、初読時の理解度は1%から5%ぐらいまで下がる。しかし興味深いのは、再読時にはその理解度がかなり向上しているということだ。どのような書物でもそうだと思うが、初読時に全てを理解しようと思うと、それは途中でその本を投げ出すことを招いてしまうように思う。

書物との付き合いは人との付き合いと同じであり、何度も書物と向き合っていくことが大切になる。最初は挨拶程度の読書で十分である。初読時にはその書籍で言わんとしていることの概要を掴んだり、全体の流れを感覚的に把握していくことが大切になる。もし本文の中で本当に気になる箇所があればそこで立ち止まり、ゆっくりとその箇所を読んでいく。そうした箇所が一箇所でもあれば、その書籍は自分にとって非常に意味のあるものだと言えるのではないかと考えている。

今日読んだアドルノの書籍はまたいつか読み返すことになるだろう。再読の日は近くないかもしれないが、その時にはまた今日とは違った発見があり、今日以上に理解出来る箇所が増えているだろう。

明日からは、ミシェル・フーコーの処女作“Madness & Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason (1965)”と、ヨルゲン・ハーバーマスの批判理論に関する書籍“The Critical Theory of Jurgen Habermas (1988)”を読み始める。それら二冊と教育哲学は一見すると関係のないように見えるかもしれないが、人間発達を主軸において考えてみると、両者の間には共通事項が隠されていることに気づくだろう。これから読み進めていくいかなる哲学書も、絶えず人間発達と教育に引きつけて読み進めていく。

すべての探究の出発点と根幹に、人間発達と教育があり、自分の直接体験を総動員させながら、とにかく自分の関心に引きつける形で無数の哲学書を読んでいく。全ての哲学は、自己の関心に引きつけなければ結局無用の長物だが、ひとたび自分の関心に引きつけると、それは極めて実践的な力を発揮し始める。そうした力を得、それをこの世界に還元していくことが哲学が果たす一つの大きな役割であるように思える。フローニンゲン:2018/9/21(金)20:19

3158. 光で満たされた海: 覚めぬ夢

土曜日の朝を迎えた。今日は六時半に起床し、七時から一日の活動を開始させた。今日も探究活動と創造活動を充実させていきたいと思う。

昨日まで存在していた雨雲はどこかに消え去り、今は少しばかり雲はあるが、穏やかな空が広がっている。風はほとんど吹いておらず、それがまた静かな空間を生み出すことを後押ししている。

秋は自分が生まれた季節であるせいもあってか、どこか自分に跳躍をもたらすように思える。今年の秋は何かしらの発達上の跳躍が起こるかもしれないという予感がここ最近あり、それは来年以降の自分の人生を大きく方向付けていくものになるのではないかと思う。

昨夜は雨雲も手伝って、非常に濃い闇夜が広がっていた。しかし昨夜体験した不思議なことは、光で満たされた海に飛び込み、その中を泳いでいるような感覚がしたことである。その感覚をもとに一つ曲を作った。とても明るい曲が出来上がったように思う。

自分の内的感覚を言葉として表現するだけではなく、音楽として表現することがどれだけ有意義なことかを実感している。一つの感覚を様々な表現手段をもとにして表現していくことを繰り返すたびに、内的感覚そのものが豊かなものになっているのを感じる。やはり、内側の感覚というのは表現されることによって、新たな創造運動を生み出していくのだろう。今日も内的感覚を豊かにしていく一日になる。

ふと書斎の窓から外を見上げると、薄赤紫色の美しい空が広がっていることに気づいた。この色彩は夕日が現れる際に見られるものであり、朝に見られるのは珍しい。以前言及していたように、それはどこかモネの色使いを思い起こさせるような光景である。薄い青空の上に白い雲が少しばかりか

かっており、それに柔らかな朝日が反射することによって、雲が薄赤紫色に色づいている。今はそうした朝の美しい空をぼんやりと眺めている。

闇夜が明け、新たな一日の初めにこうした光景を目の当たりにできることを嬉しく思う。そういえば、今朝方は夢を見ていた。感覚的には印象に残っているのだが、それを言葉の形にすることは難しい。TOEFLのような英語の試験を受ける夢であり、友人もその試験を受けることになっており、彼の試験勉強を手伝っているような夢だった。

こうした夢を見ながらも、夢を見ない意識の中で一体何が起きているのかに関心を持つ。それは闇夜の儀式にも似た秘教的なことでありながらも、それについて知る方法はいろいろとある。ドリームヨガというのはまさにそうした方法の一つだろう。夢を見ない意識を通過し、再び夢を見て、今は覚醒した意識の状態にある。

しかしここでも、「自分は目覚めている」という夢を見ていたとしたらどうだろうか？ということに考えが及ぶ。現代社会で厄介なのは、「自分は目覚めている」という夢を見るところまではいかないが、目覚めた状態の中で夢を見させられていることにあるのではないかと思う。しかもその夢は、ほとんどの人にとっては覚めることのない永続性のあるものである。引き続き、現代社会の夢の内容、夢が生まれる要因と構造、夢からの脱却について考えを深めていく必要がある。

「夢を持ちましょう」という一見すると聞こえのいい言葉も、それもまた幻想的な夢の世界に人々を閉じ込めることに働きがちであるから厄介だ。人々を夢の世界に縛り付ける具体的な事例は枚挙にいとまがない。フローニンゲン:2018/9/22(土)07:23

3159. 暫定的な絶対的真実及び異様な熱気を持つ書物

モネのような色彩を帯びた朝焼けがもうほとんど見えなくなった。今はまた、日常の景色に戻った。自然が生み出す景色というのは、生き物なのだとつくづく思う。先ほどはあのように美しい朝焼けを見ることができて幸運だったのだろう。おそらく自分にあるのは、こうした幸運だけなのだと思う。私の人生は運を得ながら進んでいるというよりも、もはや運として進んでいるかのような感覚だ。これまでの人生の歩みを考えてみると、自分の人生は運と一体化する形で進行していることがわかる。そ

うすると、感謝の対象は運のみならず、人生そのものになるのは必然だろう。運が人生として、そして人生が運としてこれからも流れ続けていくことを願う。

昨日の午前中に協働プロジェクトに関するミーティングを終えた後にふと、暫定的な絶対的真実に基づいて日々を生きることの大切さについて考えていた。自分の内側の中で常にある種の正しさの感覚があり、それは諸々の事象の判断の際に耐えず活用されている。この正しさの感覚は自分の中の真実に基づいて生み出されているのだが、それはその瞬間においては絶対的なものであり、同時にそれはさらに深まっていくという点において暫定的であるという気づきを得ていた。

こうした暫定的な絶対的真実を涵養していくことが内面の成熟なのではないかと思えてくる。涵養する方法は、耐えずそれに認識の光を当て、その正しさの度合い(幅と深さ)を検証していくことである。自分が日記を耐えず執筆していることは、暫定的な絶対的真実の絶え間ない検証につながっているだろう。今日もそうした検証作業を行っていく。

学習は単に認知や内省によって成し遂げられるのではなく、アクションを通じた構築が必要になる。これはピアジェを含め、構造的発達心理学の根幹的な考え方である。そしてこの考え方は、自分の暫定的な絶対的真実を発達させていく際にも当てはまる。認知や内省及びアクションを通じてそれを常に新たなものに更新していく。今日の一つ一つの実践はそこに向かっていくものである。

起床して一時間ほどが経とうとしている。今日はどうやら穏やかな土曜日になりそうだ。今日は昨日に言及していたように、ミシェル・フーコーの処女作“Madness & Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason (1965)”とユルゲン・ハーバーマスの批判理論に関する書籍“The Critical Theory of Jurgen Habermas (1988)”を読み進める。そして昨夜パラパラと眺めていた、ヘレナ・ブラヴァツキーの“The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy (2014)”の中で自分の関心を引く箇所を丹念に読み進めていく。昨夜もまた、この書籍が放つ異様な力に少しばかり圧倒されていた。

フーコーの書籍にせよ、これから自分が読み進めていく書籍はできるだけ、そうした異様な熱気を持つ書物に絞りたいと思う。そうした書物こそが自分を真に深めていく。フローニンゲン:2018/9/22 (土)07:41

今日から気温が随分低くなり、秋の肌寒さを感じていたところ、冷たい夏の日をふと思い出した。今年の夏は確かに暑さを感じさせる日があったが、それは数えるほどであった。ほとんどが冷たさを感じさせる日々であったように記憶している。そうした記憶に浸りながら、午前中の活動に取り掛かっていた。

早朝に、モーツァルトの変奏曲に範を求めて一曲作った。曲を作った後、いつものように自分の作った曲を聴きながら、瞑想的な意識の中で無心で絵を描いていた。絵といっても色鉛筆を使って描く程度のものなのだが、絵を描くときの瞑想的な意識の状態は注目に価する。また、作曲の過程においても、確かに思考が優位なことが多いのだが、それでも瞑想的な意識状態で音を構築していくことがある。

旅の持つ意義の一つに、非日常的な意識を私たちにもたすことが挙げられるが、作曲や絵画の制作もそうした非日常的な意識に誘う作用があることを改めて実感する。日々曲を作り、作った曲によって喚起される内的感覚を絵として表現していると、単に座して感得される瞑想意識とは幾分異なる意識状態が醸成されるようになってきている。そしてそれは普段の生活の隅々に流れ込んでくるようになった。例えば、読書の最中においてもそうした意識状態に自分がいることが多くなっていることに気づく。

今朝方、ようやくヘレナ・ブラヴァツキーの主著“The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy (2014)”の第一巻を読み終えた。本書は600ページ以上にわたる分量であり、隅から隅までを読んだのではなく、自分の関心事項に絞って読み進めた。

その最中に、自分の意識状態は瞑想的なものであったことに気づく。こうした瞑想的な意識状態で書物と向き合うと、通常の意識状態で得られる事柄とは別次元のものが得られるような気がする。それは著者が本書に込めた実存的なエネルギーであつたり、あるいは叡智と呼ばれるようなものである。それらが自分の内側に静かに流れ込んでくるかのような感覚があつた。本来読書とは、こうした何らかのエネルギーや叡智の移転が伴うものなのではないかと思う。

ブラヴァツキーの書籍を読んだ後にとりかかっていたのは、ミシェル・フーコーの処女作“Madness & Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason (1965)”である。これは本当に洞察に溢れる書籍だ。

今回が初読であるから細部に入り込んで読み進めていたわけではないのだが、フーコーが採用した歴史的アプローチは、自分が博士論文を書く際のヒントになると思った。確かにフーコーが引用する歴史上の事柄は、歴史家から見れば事実として不確かなものがあるらしいのだが、フーコーは歴史における事実としての正しさに着目していたわけではなく、歴史上の出来事に内包される考え方に着目をしていた。

仮に私が芸術教育の意義に関する論文を執筆する際には、同様のアプローチを取るかもしれない。歴史の細部に入り込むのではなく、歴史上の出来事を取り巻く背景の思想に着目し、そこから現在における芸術教育のあり方を考察していくような内容にしたい。午後からは引き続き、フーコーの書籍を読み進めていく。フローニンゲン:2018/9/22(土)13:22